



コタンメール Kotanmail No.68

北海道白老郡白老町若草町 2-3-4

財団法人 アイヌ民族博物館

2013年3月20日発行

<http://www.ainu-museum.or.jp>

■アイヌ文化伝承者（担い手）育成事業から

「ここいく放課後自然体験活動」 に参加して

札幌の円山動物園近くに、小学生の子ども達の放課後を充実させるため楽しいイベントを企画しているNPO法人「のこたべ」事務所があります。今回標記のようなNPO法人「ねおす」との共催事業に呼ばれて、イオル研修生の皆さんと一緒に行って来ました。この研修は2期生が丸2年を経過し、残り1年を残すのみです。そろそろアイヌ文化について勉強して来たことを人に伝えるという段階に進む時期かなと思い、いきなり子ども相手というのはハードルが高いのですが、思い切ってチャレンジしてみました。

最初から到達目標を高くしすぎると中途半端にしか伝わらないだろうと思ったので、「アイヌ文化って何だか楽しい!」という子ども達の感想を聞くことを今回の目標とし、内容をみんなで検討した結果、昨年12月に習得した火おこしの技術（コタンメール No. 65 参照）を駆使してのハルニレの焚き火、その火でじゃがいもを焼く、それからアイヌ語で早口言葉や座り唄、盛りだくさんの内容を持って行くことになりました。

まず火打ち石を使つての火おこしは、「すごい!」「初めて見た!」子どものみならず大人のスタッフからも歓声があがり、掘みはバッチリでした。次に弓でおこすやり方を子ども達と一緒にやってみましたが、時ならぬ大雪で残念ながら成功せず。でも高学年の男の子達は最後まで真剣に取り組んでくれました。



弓を使った火起こしに挑戦

次は室内で早口言葉とウポポ（座り歌）をやってみました。試しに研修生がウポポを独唱してみると、裏声の部分がおかしかったらしく、ツボにはまって笑いが止まらなくなった女の子がいたり、大きな声を出しすぎてふざけ



「アイヌ語の早口言葉で遊ぼう」

ちゃった男の子がいたり。でもウコウクという言葉を取り合うようにして唄う方法の実践が始まると、どの子も他のパートにつられまいとして真剣そのもので唄い出し、最後はきれいな声でウコウクの輪ができあがったのには本当に感心しました。

そして焚き火で焼いたじゃがいもを食べました。ジャガイモは栽培種としてアイヌ文化にもたらされたのはおそらく近代以降のことですが、ちゃんと樺太方言で「ヌチャトマ」というアイヌ語名が採録されているのです。意味は「ロシア人の根茎（いも）」。はるばる北方経路でもたらされたものだったかと想像力を働かせつつ一口。「甘い!」と子ども達も大喜び。ちなみにこのじゃがいもは「のこたべ」さん提供、昨秋の収穫物を有り難くいただいたのでした。

食べながらデジタル絵本「パナウンペとハルニレの木」を見て、アイヌの神様についてみんなで考えてみました。火の神様、ハルニレの神様はとても偉い神様なのです。昔の生活ってなかなかイメージできませんが、電気も何もない生活の中での火の役割、よく燃えるハルニレの役割に思いを巡らし、とても大事なものだったということは納得してもらえたようでした。さてそして今日のまとめとして「何が一番楽しかった?」と子ども達に聞いてみると、「全部!」という答えがたくさん返って来ました。デビュー戦はそれなりの達成感が得られ、ほっとしました。

今回のイベントは、子ども達が意欲的なことも大きな成功要因でしたが、それを支える現地の大人サポートスタッフが充実していました。アイヌ文化についてもっと知りたい! という気持ちで全体がひとつになれたような気がします。イベント後にスタッフの方から「研修生の皆さんが子ども達と真剣に向き合い、誇りを持って教えようとする姿勢が素晴らしかったです」という嬉しいメールをいただきました。イオル研修生の皆さん、お疲れさま。またこのような機会があればどんどん参加しようと思っていますので、一緒に頑張りましょう。

(ウトナイ湖サンクチュアリ 安田千夏)

本当の名前

◆『千と千尋の神隠し』のトンネル

わが家は一家そろってアニメ好きです。特に息子らは宮崎駿に育ててもらったと言ってもいいぐらいで、英単語や公式は覚えられなくても、宮崎アニメのセリフは昔の「活動弁士」並みに暗唱できるという特技を持っています。

その宮崎アニメですが、『もののけ姫』（1997年）と並んで『千と千尋の神隠し』（2001年）はアイヌの世界観と重なる部分が多い作品だと思います（今さらですが）。

たとえば物語の冒頭、千尋の一家がトンネルを通過して不思議の町に迷い込み、両親はその町の食べ物を食べて豚にされ、帰れなくなります。このくだりは日本神話の「黄泉の穴」や「黄泉戸喫（よもつへぐい）」を連想する方もあるかと思いますが、アイヌにも同様の伝説が残されています。

白老と登別の境、アヨロ海岸にアフルパロ（あの世の入口）と呼ばれる洞窟があります。このような洞窟をアイヌは死者の国への通路と考えました。死んだはずの人が昆布拾いをしていて洞窟から帰って行ったとか、それを追って異界に迷い込んだ話などが各地に残されています。また物語

の最後、千尋が現世に帰る時に「決して振り向いてはいけません」と忠告されますが、これもアイヌの葬式の引導渡しなどで必ず言う言葉です。



アフルパロ（白老町虎杖浜アヨロ海岸＝2009年復元工事後）

◆名前と素性

さらに、タイトルにもなっている名前に関するエピソード。主人公の少女荻野千尋は、湯婆婆から名前を奪われ「千」となることで湯婆婆に操られるようになります。同じく湯屋で働き、時々白い竜に化身する謎の少年ハクも名前を奪われていますが、千との関わりの中で本当の名前や素性を思い出し、その呪詛から逃れます。ハクの本当の名前はニギハヤミコハクヌシ、「コハク川」という名のある川の神だったのです。

名前や素性が人を左右するという考えはアイヌにもありました。白老や登別に伝わるアイヌの物語「小狼の神が自ら歌った謡“ホテナオ”」（知里幸恵編訳『アイヌ神謡集』岩波文庫所収）は、小狼の神と謎の小男が、岬や川の昔の名前、今の名前、相手の素性などを明かし合う話です。素性を明かされた小男は神通力を失い、正体をさらして退散する結末です。

また、本名で人を呼ぶと魔物に付け入れられて危難が及ぶとか、それで名前を言いたがらないので和人の役人が困ったなど、いろいろ逸話が残っています。赤ん坊に「糞のかたまり」など汚い名前と呼ぶ風習も同様の理由でしょう。もっとも、「牛若丸」など昔の和人の幼名や、船の名前によく使われる「○○丸」というのも「オマル」のことで、魔除けの意味で付けたという説がありますから、和人も「アイヌの迷信」と言って笑えない話かも知れません。考えてみれば、今日私たちが名前や住所など個人情報悪用の悪用を恐れて神経質になったり、それで国勢調査に支障が出たりするのだから、ある意味大差ないかも知れません。

◆土地の本名とルーツ

私たちが住む土地、山や川、岬にも本名があります。それがアイヌ語地名です。地元の方はご存じの通り、白老（しらおい）<シラウオイ）もアイヌ語で「アブの多い所」という意味ですね。道外の人にはなかなか「しらおい」と呼んでくれませんが。

自分の住んでいる土地のアイヌ語地名やその由来を知るとは、自分のルーツを知ることでもあると思います。博物館の仕事で出会った地名の話をいくつかご紹介しましょう。

◆「悪い川」のルーツ、秋田の油田と銀山

以前、秋田県の方から電話で質問をいただきました。秋田県にかほ市に「院内（いんない）」という地名があって由来を調べているのだが、これはアイヌ語ではないかというのです。

院内は、原名はアイヌ語のウツナイで「悪い川」の意味。苫小牧にある植苗（うえなえ）と語源は同じです。何が悪いかは今では不明の場合が多いのですが、「水質が悪くて飲めないとか、そういう場合もありますが」と私が言うと、電話のかたは、上流に油田があって油がしみ出しているとのこと！ 後で調べると、かつて院内油田として栄えた所でした。同じ秋田県の別の所にも院内という地名がありますが、こちらは東洋一とうたわれた院内銀山があった場所。油や鉛毒が混じって飲めないとか魚がいないとか、どちらも理由がわかりやすい「悪い川」の例でした。

◆会津坂下町の「ばんげ」と「うない」

毎年春に自治体対抗のスポーツイベント「チャレンジデー」というのがあって、白老町の2006年の対戦相手は福島県の会津坂下町でした（結果は白老町の負け）。「坂下」は、普通に読めば「さかした」でしょう？ ところが町の担当者の方から「ばんげ」と聞いて「アイヌ語だ！」と思いました。

ばんげ、正しくはパンケ「川下」のこと。北海道にもあちこちにあるアイヌ語地名。パンケ沼、盤溪温泉、ばんけいスキー場、みな同じ語源です。中でもこの「坂下」はうまい当て字だと思つた記憶があります。

同じ会津坂下町内に「宇内（うない）」という地名がありますが、地名研究の大家・故山田秀三氏によればこれもウツナイ（肋骨・川）が語源で、だとすれば苫小牧のウツナイ湖や、ポロトの森から当館の裏を流れる「ウツナイ川」も語源が同じです。「ナイ（内）」がつく地名はアイヌ語地名の代表格ですが、北海道ばかりでなく、東北北部だけでも約400あるそうです（山田秀三氏による）。東北地方のアイヌ語地名のほぼ南限の例なのでした。



領土問題がざくざくして「中国人や朝鮮・韓国人は自分の国に帰れ」というようなことを言い出す人がいますが、当の多くの北海道民が「本州へ帰れ」と言われたいことをよいことに、自分たちはどこから来てこの北海道にいるか、自分の素性が分からなくなっているのかもしれない。まるで『千と千尋…』のカオナシのように。
(安田益穂)